

電機店と喫茶店

電機店を開業して間もなく、店の一部分を今野さんと云う子供のない夫婦に貸した。今野さんは失業中だった。

夏は氷水、秋から冬は回転焼き、春は団子等を売っていた。狭い店だが繁盛していた。

私は大洋漁業釜石事業所所属のマグロ延縄漁船に、無線通信士として乗船していたが、船長の館洞（タテホラ）さんが体の都合で下船すると言うので、私も下船する事に決心した。

『海は危険だから早く辞めて仙台に店でも出したらどうか』と言われていた。幸い手頃な商店向きの売家があったので、結婚一年後に既に購入してあった。

昭和三十一年に仙台に引越し開業したが、知らない土地であり商売も始めてである。石の上にも三年と云うが、電氣店だけでは生活は覚束ない。魚屋だった店なので、三分の一位仕切っていた。その部分を貸し、生活費の足しにした。

電氣店と喫茶店は相性が良いと言うが、繁盛する事、驚くばかり。秋になって回転焼きを始めると行列が出来る始末、今野さん夫妻は汗ダクダクの大奮闘だった。

春になるとダンゴを始める、ゴマ、餡、醤油、ずんだ、等飛ぶように売れる。夏は氷水、いちご、小豆、シロップ、等夜遅くまで働く、散歩がてらに寄って食べて行く人が多い。

今野さん達は店を戸締り、幼かった子供達を風呂に入れてくれ、自分達も汗を流し帰って行くのが、日課だった。

約三年位で今野さん達は閉店した。奥さんは体が余り丈夫でなかったようだ。旦那さんは営業中、自動車二種免許を取得、タクシーの運転手になり、サラリーマン生活に戻った。

妻は今野さん達の仕事ぶりを見ていたから、喫茶店を引き継ぎ営業する自信が有ったのだろう。電氣店はまだ軌道に乗っていない。収入が減っては生活が心配だから、決心したのだろう。

今野さんが営業していた機材一式を譲受け、店を小奇麗に模様替え、保健所の検査を受け、回転焼きから営業を始めた。

最初に仕入れの問題、食材の仕入れは始めてである。妻は一人

駄けずり回り契約、小豆、小麦粉、砂糖、等は三十キ口、一俵単位で配達、牛乳やパンも配達してくれる。ダンゴは桶を持って行って細長く温かいのを仕入れてくる。妻はバイクの免許持って居たから、バイクで行く。近くは徒歩か自転車だった。

朝早く起き、小豆を煮て餡を作る、毎朝四時には起き出していた。餡作りは一年中ある仕事だ。春はダンゴの餡、夏は小豆氷水、秋から冬にかけては回転焼きの餡、小豆は一年中使う。

妻は私が出掛けていると、電気店のお客もお相手しなければならぬ、私が帰って来ると今度は反対に喫茶店を手伝う。

夏氷水の出前が多かった、今では考えられないが、一杯十円から二十円、箱に入れバイクで片手運転配達だ、マゴマゴしていると溶けてしまう、私が不在の時氷水の出前があり、妻がバイクで配達したが、帰りバイクのエンジンがかからないので、徒歩で帰って来た事があつたと。その当手を思い出して話してくれた。

東北高校陸上部の生徒が、グラウンドに練習に来ていた頃だ。

子供達も友達を連れてくる、友達の親御さんに「子供が電気屋さんに行くのを楽しみにしていますよ」と言われる位、商売物を食べさせていた。儲けが少ないが、又楽しみの一つだった。

氷水は欠き氷とも云った、電動でなく手回しだったから妻は大変だったろう、朝早く起き、店の準備、主婦としての家庭の仕事、子供の世話、よく頑張ってくれた。

四、五年位続けた頃になって、電気工事を始め、なんとか電気屋だけで生活のめども付き、喫茶店は閉店することにした。

器具一式は村田町に嫁いだ私の妹に無償で進呈、妹はダンゴ、かき氷、回転焼き（今は大判焼き）を現在まで続け、いろいろ研究、現代風な店に仕上げ、村田の名物になっている、亭主は体が弱く手伝って貰えない、孤軍奮闘、店付き住宅も新築もした。

「なかちゃんにこの仕事を、教えて貰って、本当に良かった」と感謝してくれる。

四十年以上も前の人生の一齣だ。妻はよく働いた。不平不満は一度も聞いたことが無い、子供達も素直に育ってくれた。